

東京クリニック

医薬品情報

TEL 03-5287-5532

Web <http://www.tokyo-clinic.jp>

Mail info@tokyo-clinic.jp

※印：2004年5月改訂(第4版)
 ※印：2003年3月改訂

日本標準商品分類番号
872649

貯法：しゃ光保存
 使用期限：外装に表示の使用期限内に使用すること。
 規制区分：指定医薬品

	軟膏	クリーム
承認番号	(01AM)0346	(04AM)1098
薬価収載	1989年8月	1992年12月
販売開始	1989年8月	1992年12月
再審査結果	1998年3月	1998年3月

非ステロイド系抗炎症外用剤

スルプロチン[®]軟膏
スルプロチン[®]クリーム
 SULPROTIN
 スプロフェン軟膏・クリーム



【禁忌 (次の患者には投与しないこと)】
 (1)本剤の成分に対し過敏症の既往歴のある患者
 ※(2)ケトプロフェン(外用剤)、チアプロフェン酸、フェニフィブラート及びオキシベンゾンに対して過敏症の既往歴のある患者 [これら製剤との交叉感作性により、本剤の使用によって過敏症を誘発するおそれがある]

【組成・性状】

●スルプロチン軟膏

組成	1g中：スプロフェン……………10mg(1%) <添加物> 白色ワセリン、流動パラフィン
性状	においのない白色～微黄色半透明の軟膏
識別コード	SP-O

●スルプロチンクリーム

組成	1g中：スプロフェン……………10mg(1%) <添加物> オクチルドデカノール、酢酸トコフェロール、自己乳化型モノステアリン酸グリセリン、ジメチルポリシロキサン、スクワラン、セタノール、大豆レシチン、トリ(カプリル・カプリン酸)グリセリン、白色ワセリン、パラオキシ安息香酸ブチル、パラオキシ安息香酸メチル、プロピレングリコール、ポリオキシエチレンセチルエーテル、pH調整剤
性状	においはないか、又はわずかに特異なにおいを有する白色～淡黄白色の乳剤性の軟膏
識別コード	SP-C

【効能・効果】

急性湿疹、接触皮膚炎、アトピー性皮膚炎、慢性湿疹、皮脂欠乏性湿疹、酒皸様皮膚炎・口囲皮膚炎、帯状疱疹

【用法・用量】

- 急性湿疹、接触皮膚炎、アトピー性皮膚炎、慢性湿疹、皮脂欠乏性湿疹、酒皸様皮膚炎・口囲皮膚炎
 本品の適量を1日数回患部に塗布する。
- 帯状疱疹
 本品の適量を1日1～2回患部に塗布又は貼布する。

【使用上の注意】

- 重要な基本的注意**
 本剤の長期使用により過敏症状があらわれる可能性がある。
- 副作用**
<軟膏製剤>
 スプロフェンを1%含有する軟膏製剤における承認時及び使用成績調査の結果を集計したところ、安全性検討症例14,044例中副作用が報告されたのは、186例(1.32%)であり、主な副作用は発赤64件(0.46%)、刺激感57件(0.41%)、癢痒53件(0.38%)、紅斑44件(0.31%)等であった。また、臨床検査は112例に実施されたが、本剤に起因すると思われる変化は認められなかった。¹⁾ (再審査終了時)
<クリーム製剤>
 スプロフェンを1%含有するクリーム製剤における承認時及び使用成績調査の結果を集計したところ、安全性検討症例1,750例中副作用は56例(3.20%)であり、主な副作用は刺激感32件(1.83%)、発赤13件(0.74%)、癢痒10件(0.57%)、紅斑10件(0.57%)等であった。¹⁾ (再審査終了時)

	0.1～5%未満	0.1%未満
皮膚注)	刺激感、発赤、癢痒、腫脹、紅斑、丘疹、落屑、接触皮膚炎	光線過敏症

注) 発現した場合は、使用を中止すること。

3 小児等への投与

低出生体重児、新生児又は乳児に対する長期投与の安全性は確立していない(使用経験が少ない)。

4 適用上の注意

- 使用時：大量又は広範囲の使用は避けること。
- 投与経路：眼科用に使用しないこと。

5 その他の注意

外国では経口投与において側腹部痛(急激な尿酸排泄による尿酸結石)が報告されており、日本及び外国で経口剤は発売されていない。

【薬物動態】

スプロフェン軟膏を20g(スプロフェンとして200mg)健康成人(5名)の背部皮膚にODT法により8時間塗布したときの血清及び尿中のスプロフェン及びその代謝産物を定量した。

- 血中濃度²⁾
 スプロフェンは、塗布後約9.0時間で最高血中濃度(約0.21μg/mL)に達し、生物学的半減期は約3.1時間であった。
 血中代謝産物は、スプロフェンとその抱合体及び2-[p-(α-ヒドロキシ-2-テニル)フェニル]プロピオン酸であり、スプロフェンの濃度が最も高かった。

- 尿中排泄²⁾
 尿中にはスプロフェンとその代謝産物及びそれぞれの抱合体が排泄され、これらの総量は塗布後24時間までで塗布量の約6.2%であった。

(参考)カウ

スプロフェン軟膏をラット正常皮膚に8時間密封塗布した結果、スプロフェンは代謝されることなく塗布部位の皮膚中に分布した。ラット損傷皮膚に塗布した場合、正常皮膚に比較し速やかに吸収され、血中濃度、塗布部位皮膚及び各種組織中濃度とも高かった。しかし、正常皮膚、損傷皮膚ともに皮膚内濃度に比較し血中濃度及び各種組織中濃度は著しく低いことが認められた。正常皮膚に塗布したときの尿糞中排泄率は塗布量に対してラットで約23%、モルモットで約11%であった。また連続投与による蓄積性は認められなかった。

【臨床成績】^{1) - 5) 15)}

スプロフェンを1%含有する軟膏製剤及びクリーム製剤における承認時までの比較試験を含む臨床試験及び使用成績調査における成績の概要は次のとおりであった。

疾患名	改善症例数/症例数(%)	
	軟膏	クリーム
急性湿疹	1,549/1,887 (82.1)	261/320 (81.6)
接触皮膚炎	910/1,132 (80.4)	162/204 (79.4)
アトピー性皮膚炎	1,592/2,709 (58.8)	158/283 (55.8)
慢性湿疹	700/1,045 (67.0)	130/219 (59.4)
皮脂欠乏性湿疹	1,586/2,047 (77.5)	163/208 (78.4)
酒皸様・口囲皮膚炎	458/705 (65.0)	61/90 (67.8)
帯状疱疹	2,740/3,056 (89.7)	189/215 (87.9)
合計	9,535/12,581 (75.8)	1,124/1,539 (73.0)

(再審査終了時)

【薬効薬理】

1. 抗炎症作用¹⁶⁾

ラットにおける血管透過性亢進抑制作用、カラゲニン定腫浮腫抑制作用、肉芽増殖抑制作用、モルモットにおける紫外線紅斑抑制作用等の抗炎症作用が認められた。

2. 鎮痛作用¹⁶⁾

ラットの炎症性疼痛に対し、疼痛閾値を上昇させ、著明な鎮痛作用が認められた。

3. 作用機序

スプロフェンにはプロスタグランジン生合成阻害作用が認められており、これに基づいて種々の抗炎症作用を示すと考えられる。

【有効成分に関する理化学的知見】

一般名：スプロフェン(Suprofen)

化学名：(±)-2-[p-(2-thenyl)phenyl]propionic acid

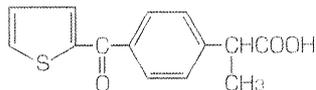
分子式：C₁₄H₁₂O₃S

※※分子量：260.31

融点：124～127℃

※※性状：スプロフェンは白色～帯黄白色の結晶性の粉末である。メタノール、エタノール(99.5)、アセトン又は1,4-ジオキサランに溶けやすく、水に極めて溶けにくい。水酸化ナトリウム試液又はアンモニア試液に溶ける。1,4-ジオキサラン溶液(1→40)は旋光性を示さない。

構造式：



【包装】

●スプロロチン軟膏

10g×10 500g

●スプロロチンクリーム

10g×10

【主要文献】

- 1) 大洋薬品工業(株)社内資料
- 2) 東等：薬理と治療, **15**(10), 4041, 1987
- 3) 横塚等：ibid., **15**(10), 4009, 1987
- 4) 横塚等：ibid., **15**(10), 4023, 1987
- 5) 原田等：臨床医薬, **3**(10), 1187, 1987
- 6) 原田等：ibid., **3**(10), 1197, 1987
- 7) 原田等：ibid., **3**(10), 1209, 1987
- 8) 原田等：ibid., **3**(10), 1229, 1987
- 9) 大河原等：ibid., **3**(10), 1239, 1987
- 10) 石橋等：ibid., **3**(10), 1255, 1987
- 11) 中溝等：薬理と治療, **15**(10), 4315, 1987
- 12) 朝田等：ibid., **15**(11), 4899, 1987
- 13) 坂井等：ibid., **15**(11), 4911, 1987
- 14) 植木等：ibid., **15**(11), 4919, 1987
- 15) 原田等：ibid., **19**(10), 4287, 1991
- 16) 久木等：ibid., **15**(9), 3631, 1987

※※【文献請求先】

大洋薬品工業株式会社 研究開発部学術情報課
〒460-0002 名古屋市中区丸の内二丁目16-29

製造発売元



大洋薬品工業株式会社
名古屋市中区丸の内二丁目16-29